

第49回新潟内分泌代謝同好会

日 時 昭和63年4月30日(土)
午後2時開会
会 場 新潟東映ホテル

一 般 演 題

1) Estrogen-renin-angiotensin 系による
排卵の予想について

佐藤 芳昭・荒川 修 (新潟大学)
谷 啓光・織田 和哉 (産婦人科)

最近 estrogen 上昇が renin 活性を刺激することが知られ、renin-angiotensin-aldosterone 系の賦活化がみられ、これが saliva 中の NaCl を低下させ、その電気抵抗を測定することで、排卵の予知が出来ることが、Colorado 大学の Fernando らにより報告され、実地臨床への応用が試みられている。われわれも Colorado 大との協同研究の形で、日本人での saliva 中の salt 測定による排卵予知の検討をすすめているが、その一端について報告した。

saliva 中での NaCl による電気抵抗の上昇は、予定排卵日の7日前にあり、かつ vaginal cervical mucous 中の NaCl 上昇に併なう抵抗値の drop をあわせると95%の自然周期をもつ婦人の排卵の予知が可能であった。

2) 尿崩症および抗利尿ホルモン不適合症
候群における抗利尿ホルモンと心房性 Na
利尿ホルモンについて

鴨井 久司 (長岡赤十字病院
内科)

3) 興味ある下垂体近傍腫瘍の2例

宮島 武文・金子 兼三 (長岡赤十字病院)
鴨井 久司 (内科)

第1例は14歳女性で、3歳時の頭蓋咽頭腫切除後、無治療で放置されていた。小児期より多飲、多尿、易疲労性、記憶力の低下を認めたが、身長伸びは正常。昭和62年、脳外科外来でコルチゾール低値を指摘され、当科に紹介された。下垂体機能検査により、真性部分的尿崩症、下垂体前葉機能低下症と診断した。本例は GH 分泌低下とソマトメジン C が低値を示したにもかかわらず、身長体重ともに標準偏差内の発育を認めた点が興味深い。第2例は65歳男性で、昭和62年、食思不振が出現し、傾眠状態となったため当科に入院した。入院時、著

しい高血糖と脱水を認め、非ケトン性糖尿病昏睡と診断した。輸液とインスリン微量注入により、糖尿病昏睡は軽快した。このときの頭部 CT 上、トルコ鞍から蝶形骨洞内に進展した腫瘍性病変を認めた。下垂体機能検査によりプロラクチノーマと診断した。CB 154 療法により、腫瘍の縮小を期待している症例である。

4) 鞍上部胚芽腫の内分泌学的検討

黒木 瑞雄・横山 元晴 (新潟大学)
田村 哲郎・鷺山 和雄 (脳神経外科)
田中 隆一

目的：鞍上部胚芽腫患者の内分泌学的所見の推移につき検討した。対象：昭和42年から61年まで当科で治療した鞍上部胚芽腫患者13例中、現在まで follow up している8例を対象とした。内訳は女性6例、男性2例で入院時の平均年齢は16.5才である。治療は放射線治療が全例になされており、そのうち4例は手術により組織が確認されている。8例の平均 follow up 期間は9.5年である。結果：1) 鞍上部胚芽腫は若い女性に多く、尿崩症を初発症状とし、入院時は種々の下垂体前葉機能障害による内分泌症状を伴う。2) 下垂体前葉機能検査では PRL, TSH 以外は高率に障害されており、治療によりさらに PRL, TSH も障害される傾向を認めた。3) 治療により腫瘍は完治するも、尿崩症および下垂体前葉機能障害は改善され難く、長期に亘るホルモン補充療法を必要としている。

5) 著明な低血糖と代謝性アシドーシスを
伴ったホパテン酸カルシウムの投与例

上原由美子・高木 顕彬 (新潟市民病院)
田中 直史・山田 彬 (内科神経内科)
荒井 元美

私達は、来院時著しい低血糖と代謝性アシドーシスを認めたホパテン酸カルシウム投与例を経験したので報告した。

症例は72才女性で、脳梗塞後高脂血症、心電図異常あり、ホパテン酸カルシウム、ジルチアゼム等を内服していた。元来少食のところ朝食抜きで外出し、意識障害をきたし当科受診。他に神経学的異常なく、緊急検査にて血糖7mg/dl, pH 7.097, WBC 24700/ μ l, 尿アセトン体2+だった。点滴にて糖質補ったところ、直ちに意識状態改善した。内分泌学的には異常なく、これまでの内服薬中止にて、その後意識障害をきたすことはなかった。本例は、低栄養状態においてホパテン酸カルシウム